



藤田 衛

一級建築士

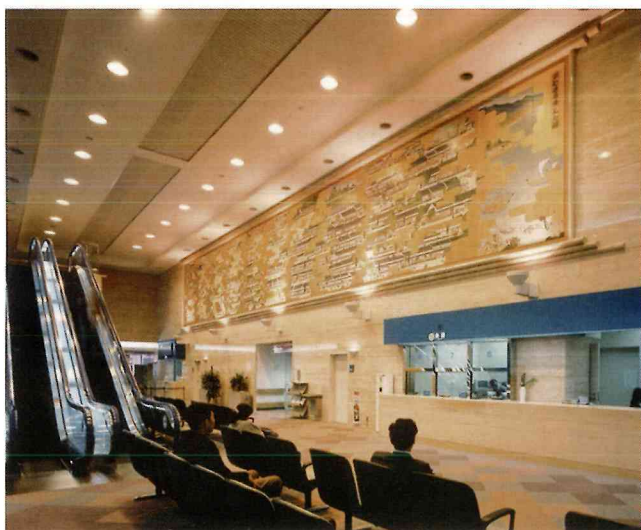
株式会社 山下設計

取締役常務執行役員本社長

### 病院建築とアートのこれから

我が国の病院に積極的にアートが置かれるようになったのは1960年代の初め頃からはなかったかと思う。いわゆる国民皆保険制度がスタートしたのが1961年、その後、医療のフリーアクセス化が進み、病院建築が誰もが等しく利用できる公共施設としての性格を強めていった時期と重なるのは偶然ではないだろう。つまり我が国の病院建築におけるアートの端緒は、公共空間に置かれるパブリックアートであったといえる。

そのため当時のアートは、病院の中でもエントランスまわりや総合受付ホールといった公共的性格の強い空間に、比較的大きな壁画や彫刻などのかたちで設置されることが多かった（写1）。



写1：パブリックアートとしての病院アート

そのような状況に変化が生じ始めたのは、ちょうど筆者が病院建築の設計に携わり始めた1990年代の初めからである。その変化は、アメリカの学者、R. S. ウルリッチ (Roger S. Ulrich) の論文、「窓からの自然の眺めが術後の回復結果に及ぼす影響 1984 (View through a window may influence recovery from surgery, 1984)」によるところが大きいと考えている。ウルリッチの論文によると、“手術後、窓から緑の木立の見える病室で療養した患者は、レンガ塀しか見えない病室で過ごした患者に比べ、在院日数が短く、強い鎮痛剤の要求量が少ない”ということを実証したという。つまり、患者のまわりの環境が病の回復や治癒に大きく影響する、というのである（図1）。

この論を受け、我が国でも1980年代後半から1990年代初めにかけて「ヒーリングエンバイロメント healing environment」、「癒しの環境」、「治癒的環境」といった言葉が、病院建築の設計の場で頻繁に使われるようになっていった。そのような流れの中で、環境を形づくる重要な要素の一つであるアートも病の治癒に効果があるはず、と考えられ始めたのである。

### ウルリッチ Roger S. Ulrich による実証。

「窓からの自然の眺めが術後の回復結果に及ぼす影響 (1984) 」  
View through a window may influence recovery from surgery  
Roger S. Ulrich, 1984

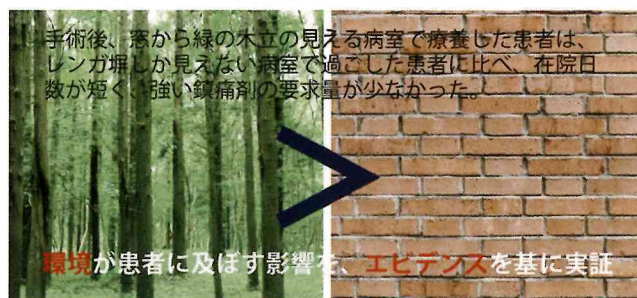


図1：ウルリッチの論文

病の回復と患者の環境の関係では、ナイチンゲール Nightingaleを語らないわけにはいかないだろう。19世紀のイギリスで、ナイチンゲールは“空気、陽光、温度など療養環境（患者のまわりの環境）が大切であり、それらの質を高めることが患者の回復につながる”と説いたのである（図2）。ナイチンゲールの思想は現代の病院建築の設計者の間で既に定着していたため、それを実証したウルリッチの説も抵抗なく浸透していった。このことが1980年代後半以降の病院アートのあり方に大きな変化をもたらしたと考えている。

こうして我が国の病院アートは、公共空間に置かれるパブリックアートとしてではなく、むしろプライベートな空間（病棟や病室、待合など）に、病の治癒や回復のための環境装置として捉えるケースが多くなっていったのである。



図2：ナイチンゲールの思想

病院アートの役割が変化し、大きな壁画や彫刻などのいわば一点豪華主義から、ヒューマンスケールものを院内に数多く配置することが多くなってきている（写2）。

アートの数が増えれば、アート全体を通して一定のテーマに基づくプランニングが重要になる。さらに、設置する場所と作品のモチーフとの関係に関する細かな配慮や調整も必要である。このような仕事を、アートに関する専門知識と多数の作家とのコネクションを持つコーディネーターに依頼するケースも増えている。

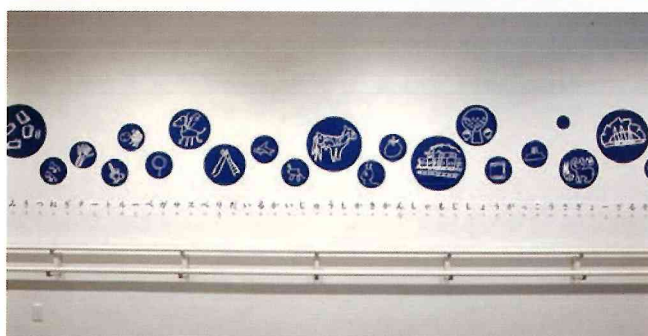


写2：ヒューマンスケールの病院アート

我が国は今、団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるように、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築を目指している。地域包括ケアシステムの実現には、医療や介護に地域住民が積極的に関わる環境づくりが鍵となる。

私たちが設計した福岡市立こども病院では、市内の小中学生が描いた絵をアートやサインに取り込んでいく（写3）。地域と医療をつなぐ試みの一つである。福岡のようにそのための道具としてアートを活用するケースも増えてきており、病院アートの新しいあり方の一つとして注目されている。

病院アートはこの半世紀、大きく変貌してきた。我が国は今や世界でトップを走る高齢国であり、これからの日本の医療のあり方に世界が注目している。病院アートの新たな可能性についても、さらなるチャレンジが求められているといえるだろう。



写3：福岡市立こども病院のアートと市内小学校のワークショップの様子

# 第55回 aaca 講演会

## 「病院建築とホスピタルアート—その役割と展望」

- 講師：藤田 衛 (ふじた えい)  
(株) 山下設計 取締役 常務執行役員 本社長
- 日時：平成 28 年 2 月 25 日 (木)  
受 付 17:30 ~  
講演会 18:00 ~ 19:10 (質疑応答含む)  
懇親会 19:20 ~ 20:00
- 会場：AGC スタジオ 定員 60 名 (先着順)  
東京都 中央区 京橋 2-5-18 京橋創生館 2 階
- 会費：  
講演会：aaca 会員 / 一般：2,000 円・学生：無料  
懇親会：aaca 会員 / 一般 / 学生：1,000 円 (共通)
- 主催：(一社) 日本建築美術工芸協会  
事務局 TEL 03-3457-7998/FAX 03-3457-1598  
Email : simpo@aacajp.com

### ● 講師プロフィール：



1963 年 北海道生まれ  
1982 年 函館ラ・サール高校卒業  
1988 年 北海道大学 工学研究科 修士課程修了  
同年、株式会社 山下設計 入社  
主に病院建築の設計に携わり、現在に至る

### 主な作品

1997 年 長岡赤十字病院 (医療福祉建築賞・SDA 賞)  
2006 年 旭川赤十字病院 (グッドデザイン賞・SDA 賞)  
2011 年 四国こどもとおとなの医療センター  
2011 年 仙台市立病院  
(街中グッドデザイン展デザインウィーク大賞)  
2015 年 蘇州大学附属第一病院平江分院 など多数

### 主な著作

2002 年 「生き残る病院建築」 理工図書  
2015 年 「病院建築スペシャリストへの道」 建築技術

